「川西航空へ空襲」

鎌田　清子　（９０歳）

第二次世界大戦末期の１９４５年７月２７日、私は女学生３年生。母と娘３人で、西宮市甲東園２丁目に住んでいました。父は少し耳が聞こえづらくて兵役に出ずに大和証券九州福岡支店長で、赴任中。朝、空襲警報発令で親子で裏庭へ出て空を見上げると、南の上空をキラキラと銀色に光る編隊が飛んできた。と思う間もなく、ピュルー、ヒュルー、ドカン、ドカン、と破裂する音、ああ助かったと思い空を見ると、機は北の方へ行きました。家に入ると、瓦は落ち、ガラスは割れ、戸棚の物は滅茶苦茶、障子は破れいがんでいました。片付けて、表の通りに出ると、戸板で作った担架に人を乗せ、南の方へ行った。先日、同郷のクリスチャンから、あの時、お寺にもう置く場所がないので、甲東教会にもお願いに来られたそうです。後で、川西航空「仁川」への爆撃だったと聞きました。５トン爆弾は、阪急電車の線路と３軒北の家の庭（家族全滅）、５軒南の家にも、ここに住んでいられた上級生は顔に傷をされました。３発だけだったのが助かった。

姉は十三の工場、私は学校工場に動員された。姉は空襲で阪急電車が不通になったので、十三から線路の上を、神崎川、武庫川の鉄橋を渡り帰って来ました。母は上の２人が、軍需工場で時々食糧を配給してもらえたので、終戦後すぐの方が大変だったと云っていました。

　何の傷もせずに、９０才迄生きられたのは、不思議のようで、神様に感謝しなければいけませんね。終。